片貝新聞

発行所
片貝新聞社
〒947-0101
小千谷市片貝町10367-4
TEL　0258-84-3246
FAX　0258-84-2632
編集発行人　吉原芳郎
印刷所　吉原印刷㈱

題字　黒崎敬湶氏

JA片貝町
シンボルマーク
天の恵み地の恵み

今年の春休みもやるよ～
学童保育「なかよしキッズ」
利用希望者と指導者も募集

平成13年1月から色々と準備を進め、7月25日から8月31日迄の夏休み期間に、両親の共働き家庭や母子・父子家庭の小学生に安全な生活の場を与え、健全な育成を図る事を目的として活動を行った、片貝学童クラブ「なかよしキッズ」（高橋良子会長）では、平成14年度の同クラブの利用児童とその子供たちを指導してくれる、専任指導員を広く募集している。

昨年の「なかよしキッズ」利用児童は21名で主な活動は、読みきかせ会に参加、巻き寿司やカレーライス作りに挑戦、親と子の流しそうめん大会、市民プールや片貝スポーツセンター利用しての身体づくり等を行っており、今年の利用要項は▽利用場所＝片貝ふるさと会館。▽利用時間＝長期休暇は朝8時から夕方迄、授業のある平日は学校終了後から夕方迄、▽利用料その他＝3月に利用児童保護者会にて相談して決定。また、専任指導員の募集は1名で▽時間給七百五十円、▽春休みの3月25日から勤務、▽午前8時から午後6時頃まで、▽普通免許を持っている人。高橋会長は「春休みより、通年利用児童の申込みを2月上旬頃、片貝保育園、片貝小学校を通じ申込み用紙を配布致しますので、申込み希望される方、お待ちしております」と語っており、申込みと詳しい事に付いての問い合わせは、クラブ代表の四之町、高橋良子☎84－3590へ。

冬のゲートボールを楽しもう

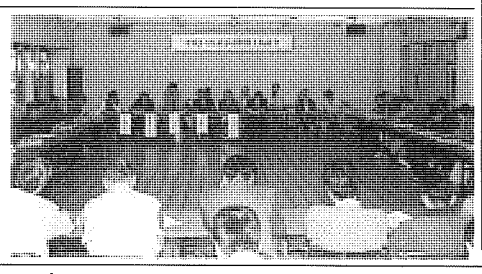
第17回JA片貝町杯争奪ゲートボール大会（JA片貝町主催）が今月の9、10の両日折立温泉【ゆのたに荘】の「特設トレーニングセンター」で開催される。

この催しは、JA片貝町がゲートボール愛好者の交流の場を設け、親睦と冬季の健康促進の活性化を計ることを目的として、開催されている大会で、毎年10チーム50名以上が参加して、昼は試合を行い、夜は温泉で汗を流し、熱燗で親睦を深める日程。

米の品質向上を目指し
ＪＡが初の対策検討会

平成14年産米品質向上対策検討会がJA片貝町の主催で、去る1月18日JA片貝町三階大会議室で開催された。

当日会場には、農家の人を始め、関係者80名前後が集まり、友田明石組合長、川上東陽小千谷土地改良区理事長の挨拶に続いて、①新潟食糧事務所小出支所の岡地業務管理官が平成13年産米の検査状況、②全農にいがた集荷推進課の栗林調査役が最近の米穀情勢、③北魚沼農業改良普及センターの田中普及員が平成13年産米作柄概況の説明があり、平成14年産米の品質向上対策として、①登熟の向上＝コシヒカリ出穂を8月5日以降とする。㎡当たり二万六千粒に向けた管理の徹底。②土づくりの推進＝気象変動に対応するため、必要に応じた土づくり。③カメムシ防除の徹底。④適期刈取りの促進。⑤魚沼コシヒカリ栽培ごよみの配布等の重点対策が発表された。



休刊の辞

片貝町をもっと良くしたい、そんな思いで平成7年7月1日に第一号、即ち創刊号を発行し、今号で80号を迎えることとなったが、読者諸氏にはまさに寝耳に水とは思うが、人的な都合により、今号を以ってしばらく休刊することになった。

感傷的になるわけではないが、足かけ8年を少し振り返ってみたい。

小紙は毎月1日発行であるから、速報性は全く重視していないことは勿論だ。一番重視しているのは地域性である。より網の目を細くして、身近なニュースを拾い、伝えることにより、地域の融和や地域のあるべき姿を論議したり、考える一助になれば、との考えがそこにはある。

日刊の全国紙には世界中、日本中のニュースの中から選別された記事が掲載される。県内紙は世界、日本のニュースも大きく扱うが、県内のニュースを詳しく紹介する。それは全国紙がとても出来ぬことで、特徴が際立つ。小千谷市だけをエリアとした地方紙も存在するが、その網の目をさらに小さくしたのが小紙なのである。

自画自賛になってしまうが、毎年5月号には片貝小、片貝中から転出の先生から一言ずつ、逆に新しく赴任してきた先生から着任の言葉を一言ずつ書いていただき、それを町民の皆さんに報じた。これは小紙ならではの企画と思う。小紙より少しでも大きな網の目の新聞は出来ない企画である。

主張

児童、生徒のいる家庭は勿論であろうが、そうでない家庭も学校に目を向けよう、との意図もあるのだ。大上段には構えはしないが、地域の中の学校であり、学校も地域の一部分なのである、という考え方に基づく。かつての先人達は、朝陽館、耕読堂という郷学を、自らの手で知恵とお金と汗を流して創設した。この精神を現代人は意識しているのであろうか、教育は全の基本である。先生方を大切に扱うのは、片貝町の歴史なのである、という所まで高めようと思えば高められるテーマであろう。

ヒューマンウォッチングもなかなかのコーナーと思う。外部から赴任して来た人からは、片貝町の直すべき点、良い点を聞きだすと共に、その人の人となりを分かるよう紹介した。地元の人はいきおい、活躍していたり有名な人が多くなってしまったが、本当は市井の誰もが登場するコーナーにしたかったのである。最近はそれでもその傾向も生じてきたが、最初の頃は「私なんかその立場でない」と断わられるケースも多かったのである。

ハローベイビーもいい。子宝に恵まれるというのは、家族だけでなく地域全体にとっても、まさに宝である、との考えからの企画である。新聞の一つの機能に記録性がある。やがて大人になった時、その記念すべき新聞を手にした時の感想は……。

両企画共、その記事をきっかけに、会話がはずんだり、融和が進んだのでは。事情が許せば、再び充電し治した小紙をお届けしたい。

塞の神行事終わる
晴天の下、大勢が火にあたる

小正月の風物詩、塞の神行事が、町内各地で開催された。1月13日日曜日は沼田町内会＝沼田ふれあいセンター脇、池津町内会＝農村公園広場、八島町内会＝旧安達医院前の田圃、高梨町内会＝高梨旧斎場の裏、14日月曜日成人の日は山屋町内会＝山屋神社、鴻巣町内会＝鴻巣広場とそれに小正月の塞の神としては県下一を自認する大塞の神行事も14日の昼と夜、浅原神社境内で行われた。

今年は13、14の両日共天候に恵まれ、浅原神社境内で行われた塞の神行事の昼の部は、小若連のモックラモチ・おんまいどに続いて、片貝商工振興会と片貝煙火協会による豪華景品引換券などが入っている「福もちまき」と小塞の神の点火が午後2時30分から行われた。また、午後6時になると、浅原神社参道にズラリと並べられた、六百本のローソクに、成人「噍聖会」により点火され夜の部の塞の神行事がスタートした。また今年も「つぐみ会」では6年連続で「一王洞」と命名したホンヤラ洞を出現させた。つぐみ会の同級生有志は、成人の日の休日を返上して自主的に集まり、昨年と同じ浅原神社境内の相撲場に約八百個の「一王洞」を作り、午後6時30分にホンヤラ洞に点火、相撲場は幻想的な雰囲気をかもし出し、訪れた人々に大好評。

午後7時から行なわれた式典では、小宮隆夫塞の神実行委員長の挨拶に続いて、川上東陽協議会長、関広一市長、木村一男県議の新年の挨拶後、ステージには今年42歳の厄年を迎えた福寿会の人達が登場し浅田一也会長の「今年42歳厄年を迎えた私達福寿会は本日浅原神社において、本厄払いを執り行いました。私達福寿会は昭和51年、片貝中学校29回卒業で会員は男子44名、女子32名です。今日は福もちと一緒に私達福寿会の名前にちなみまして、福ダルマもまきますが、暗く足もとが悪いですが、なにとぞけがのないようお願いいたします。最後に42歳人生の節目に当たり、心を引きしめ、健康に気をつけてまして、片貝町発展のため、会員一同努力をする所存です。今年が皆々様と片貝町にとりまして、福多き年でありますように…」と挨拶の後福寿会提供の「福モチまき」がおこなわれ、その後成人噍聖会の仕掛け花火の打ち上げ、成人の塞の神に点火、そしてメインの大塞の神が燃え上がると同時に、仕掛け花火と数十発の花火が豪華に打ち上げられ光の競演となり、会場を訪れた人々に感動を与えた。塞の神の火がおちつくと、集まった老若男女はそれぞれが持参した、スルメやモチを焼い

▶昼の小塞の神

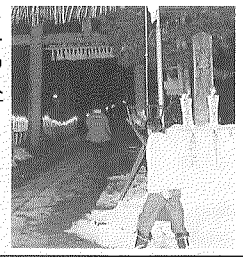
市内一の大塞の神▶

かたかい春秋

松が取れたと思っていたら、早くも二月に入った。今のところこの冬も雪はさほど多くないようである。大寒に雪ではなく雨が多く降ったが、やはり地球の温暖化が進んでいるのであろうか。▼もうすぐ立春である。とは言っても当地の冬はまだ続き、通常であれば二月が一番寒く、積雪も多くなるのであるが、今冬はどうであろうか。立春の前日は節分である。人間には完全ということはない。良心もあるかわりに、悪心も備えている。良心（＝理性）で、いかに悪心（＝欲望）を押え込めるかが人間が人間としていられるかに通じると思う。堕すれば獣となってしまう。それにしても日本に伝わる言い伝えや、風習には奥深いものがあると、つくづくと感心する。▼さて、主張でも触れているが、小紙は今号を持ってしばらく休刊することになった。少しでも片貝を良くしたい、住みよいまちにしたい、正しいことは正しい、間違ったことは誰もが違うと声を出す、そんなまちにしたいとの願いから創刊したのが、つい昨日のようでもあり、随分前のようにも思える。途半ばではあるが、記者不在のためであるので、いたしかたない。▼小紙はそれなりにまちの融和に役立ってきたつもりではあるが、読者諸氏の評価はいかがであったろうか。▼創刊当時から見れば、片貝人も随分〝ものを言う〟ようになったと思っている。氏名を明記して、堂々と意見を述べるようになった。ハローベイビーは「うちの子も載せて」と届くようになった。ヒューマンウォッチングは、白羽の矢をたてても断わる人が少なくなった等々。▼名残惜しい気もするが「さよならだけが人生さ」とキザに決めてペンを置く。

無火災を続け
一之町四区の寺町が表彰される

平成14年消防出初式が去る1月6日日曜日、消防署員32名、消防団員254名、消防車両32台が参加して小千谷市本町メインストリートなどで実施され、サンプラザ三階大ホールで挙行された式典の席上、片貝町一之町四区（小林純二寺町町内会長）が百世帯未満十五年間無火災で表彰された。尚、小千谷消防本部管内で昨年平成十三年に発生した火災は45件で前年の23件の約二倍増加で、その内訳は建物22件（前年12件）、林野8件（0件）、車両6件（4件）、その他9件（7件）といずれも前年を越えている。また、45件の市町村別の内訳は小千谷市30件（前年22件）、川口町9件（1件）、山古志村6件（0件）となっており、小千谷市30件の内訳は建物14件（前年11件）、林野8件（0件）、車両6件（4件）、その他7件（7件）で、火災による死者も3名（2名）と前年を上回っている。



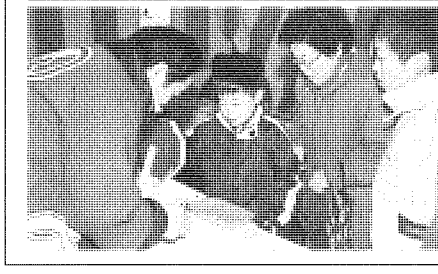
▶一〇八灯

▶福寿会木遣奉納

ＪＡ歳末抽せん会
福を求めて大賑い

JA片貝町（友田明石組合長）では、昨年12月30、31の両日「年末感謝キャンペーンの抽せん会」を実施した。

この催しは昨年の12月1日から31日までの一ヶ月間の年末感謝キャンペーンで、新定期預金毎に抽せん券、主食用の米購入に、生活センターでの現金の買い物に、JA給油所でのガソリン、軽油に抽せん補助券を発行し、補助券5枚で抽せんが一回でき、特等壱万五千円の旅行券を始め空クジなしで実施され、30、31の二日間で、約千四百名（主催者調べ）の人達が抽せん会場を訪れ、抽せんを行った。担当者は「金融課では12月末の貯金残高は百五十億三千万円を超え、生活センター、生産課、給油所も地域の皆さんのご利用とご協力により、それぞれが目標を上まわることができ、抽せん会も大賑いでした」と笑顔で語っていた。



寄稿

片貝祭りに想う事

稲場　吉井和夫

近年片貝祭り（浅原神社秋季大祭）について、いろいろ話題も多いようであるが特に祭りの中核である奉納花火、及び花火見物用の桟敷等を担当する、片貝煙火協会に注目が集まっているようだ。

又、各社務区の戸数の不均衡についても、前々から改善を求める声も聞かれる。

そこで古い資料などを基に煙火掛り（係り）の推移や、社務区割りについて考察して見た。唯私の独断と偏見に基づく調査と考え方で、間違っていたらお許し願いたい。

一、浅原神社秋季大祭　煙火係りの変遷について

明治6年片貝村の総鎮守浅原神社が村社となり、同13年片貝消防組が組織された。それらを元に、明治14年祭り行事の為町内六組が誕生、町内編成の花火玉送りが始まったとされている。当時の煙火目録（番附）に依れば、明治15、16、17年頃の花火担当は（村社、社務掛）となっており、その後明治20年代（三尺玉四発打ち揚げた明治24年）の煙火目録には（川下若者中）とある。以来昭和31年までは、川下若　又は北部若と称する「三組、て組、五組」の三組が（役員毎年交代）で煙火掛りを務め、花火の取り纏め、花火業者への発注、花火番附の作成、筒曳き行事役員等を担って来た。

しかし小千谷市合併後、昭和32年よりは片貝青年会員が主体となって、越後片貝青年煙火協会を設立、煙火掛りを担当する事になった。折から日本は経済成長期に入り、片貝からも若者達が流出、青年は各町内の祭り行事担当だけで精一杯となり、その上仕事を休んでの煙火掛りは容易ではなく、5年後の昭和36年を最後に片貝青年煙火協会は解散、煙火掛りを返上した。翌昭和37年、浅原神社当番第六区社務は、煙火掛り不在に直面、急遽同社務区役員を中心に各町内、青年煙火協会経験者等の応援を求め、初代片貝町煙火協会（会長　安達鉄太郎氏ほか11名）を立ち上げ祭りを乗りきった。

しかし毎年交代する当番社務から、会長役員等を担当するには、社務区の負担が重すぎるとの見地から、翌昭和38年より社務長会議で推薦、依頼された会長（本田善治氏）ほか六組の町内より年毎に選出の賑委員各2名、当番社務より3名の合計16名に依って、煙火協会が運営されるようになった。だが初期の片貝町煙火協会は花火の手数料収入が、町内組と競合する面もあって伸びず、番附売上に頼って刷り過ぎて赤字になったり、賑委員の報酬も無い中で各町内が賑委員に手当てを出すなど厳しい状態が続いたと言う。

その後昭和50年代より花火桟敷の開設　又、四尺玉花火の人気に依る桟敷の増設等で、収益が上がるようになり、ようやく片貝煙火協会の運営は軌道に乗って来たとの事。

そして平成5年よりは、実行委員10名前後を加えた総勢20名以上の協会員（会長藤塚昇司氏）によって、花火桟敷なども含め、花火関係一切を担当現在に至っている。

唯、昭和38年以降、毎年町内各組の賑委員が全員煙火協会に入ってしまう為本来町内の賑わいを担当すべき賑委員（取締役）が居なくなり、町内玉送りの乱調、成人いじめ等の問題が生じたとも言われている。

花火と町内の玉送りは、片貝祭りの原点でも有り、年々の少子化で、伝統有るシャギリの練習も満足に出来ない町内青年の立場を考慮し、改めて各組が、賑わい行事専属の賑委員を選出して、祭り行事等について青年達と協力できる体制をつくってはどうか。そして例えば（若）の年齢上限の引き上げ、女子小中学生のシャギリ参加や高校生の若への参加を薦める等に依って、大勢が楽しめる町内玉送りの復活を期待したい。

尚この度**片貝の木遣りと古式玉送りが**、小千谷市の文化財（風俗慣習第一号）に指定され、保護されることになった。これは片貝の祭り行事そのものが文化財と言う事である。

明治以来百数十年、片貝の先人達が創り上げた、花火を中心とする、独特の祭り文化を、時代に合わせながらも着実に継承し、文化財の名にふさわしい祭りとして発展出来るよう、みんなで考え協力して行かなければ、と思うのであるが。

二、浅原神社　社務区境界（区割り）について

以前から言われてきた、浅原神社社務区の、氏子数の不均衡について、近年益々その差が顕著となり、特に第二社務区、第六社務区は氏子戸数が少なく、逆に第一社務区は非常に多くなっているという。

祭り行事が盛大に成る程、各区独立採算会計とは言い組親始め当番氏子の作業等にも、負担の差が出ているようだ。

そこでこの区割りについて何時頃どのようにして決められたのか、探って見る事にした。

文化6年太刀川文橋著（やせかまど）に、浅原神社の前身、吉原の氏神一王子様が、片貝の鎮守となったのは明和年間1760年代で、当時片貝は新料、古料と二分されていたが、両組からの出費で祭りが行われたと記されている。が年行司の事は書かれてない。

又、安政5年新野文甫著（一王子大権現記）には、天保15年一王子様が浅原神社となり、氏子衆が大喜びで神社号の御免状を御輿に載せて、村中総出で行列して廻ったとあり、年行司一統相談の上、総氏子中に記念の品々を配ったと記されているが、各組の名前は出てこない。

その後安政5年の、社殿（拝殿、本殿）引き上げ工事の記事に始めて、浅田角右衛門組　浅田七郎左衛門組　市兵衛組　彦兵衛組など四組の年行司の名前が出て来る。しかし現在の社務区と同じかどうかは判らない。又、神社にも記録は無いと言う。（山口孝司氏寄付の一王子記録集も、昭和39年本殿調査の際、紛失している事がわかった）

明治6年、浅原神社は村社に列せられた。又明治10年2月、新料、古料が解消片貝が名実ともに一村となり、急速に村の体制が整いられ、学校（明治7年）郵便局（同7年）村会所（村役場同10年）等が出来たとされる。（片貝村誌より）

このような中で（推測ではあるが）浅原神社も六区社務制と、其の区割りが決められたものと思われる。

言い伝えに依ると一区より六区の各社務長は、当時の片貝の有力な資産家で、その住居の位置に依って区割りを定め、氏子数も大体同数になる様に分けられたとか。現在もそのままになっているので、区の境界が複雑に入り組んでいると言われている。

尚（歳入不足の場合に備えて）社務長及び　組親は土蔵が有り財産が有る事。

又、よほどの事が無い限り、社務長　組親は代々世襲制とする、そして町内や小字ではなく道路や江筋に依って区の境界を定めた、などの話も残されている。

昭和20年終戦以後は、社務長　組親始め役員の在り方も変わって来ているが社務区の境界に就いては依然として、明治初期から平成の現在まで、約130年間延々と、この区割りが続いている。

将来又、変動があるかも知れないが、この辺で一度氏子全体の問題として、区割りを、均等になるよう改めて見たらどうだろうか。

片貝住民の心のよりどころとして、崇敬してきた、浅原神社の神慮にも叶う事であると、思うのであるが。

尚、明治10年当時、片貝村の戸長を務めたのは次の人達であった。（敬称略）

丸山　平四郎（丸平）一之丁
太刀川守太郎（元新料庄屋）茶畑
黒崎　九八郎（紺屋　花火屋）三之丁
新野　文一郎（佐藤の分家）新屋敷
安達　基一郎（初代片貝村長）八島
高橋　清三郎（元酒造家）新屋敷
佐藤　佐平治（大酒造家）二之丁
小野塚彦四郎（彦兵衛さ）町裏
大塚　益郎（副大区長　元古料庄屋酒造家）一之丁（片貝村誌より）

右、九軒のうち七軒の家は今、片貝には住んで居られない。

煙火掛りと煙火打ち揚げ願人（申請責任者）について（昭和31年以降）敬称略

昭和31年　北部若　小宮　住七（三組　町内賑委員代表）
同年3月31日小千谷市と合併
昭和32年　越後片貝青年煙火協会　吉井　広吉（て組　町内賑委員代表）
同年　お囃子コンクール始まる、神社境内ヌキ仕掛禁止となる
〃33年　越後片貝青年煙火協会　安達　作次（五組　町内賑委員代表）
〃34年　越後片貝青年煙火協会　吉井清太郎（三組　町内賑委員代表）
〃35年　越後片貝青年煙火協会　友田清三郎（て組　町内賑委員代表）
同年　南部屋台壊れ以後筒曳きだけ
〃36年　越後片貝青年煙火協会　安達　正市（五組　町内賑委員代表）
昭和37年　片貝町煙火協会　安達鉄太郎（初代片貝町煙火協会長　第六区社務）
〃38年……〃56年　片貝町煙火協会　本田　善治（片貝町煙火協会長）
56年　花火桟敷開設その後再々増設
〃57年……〃58年　片貝町煙火協会　本田　善治（片貝町煙火協会長）
〃59年　片貝町煙火協会　申請責任者　本田　善治（片貝町煙火協会長）
〃〃（此の年より打ち揚げ願人改め申請責任者）同年　四尺玉打ち揚げ挑戦
60年　四尺玉打ち揚げ成功
昭和60年……平成4年　片貝町煙火協会　本田　善治（片貝町煙火協会長）
平成5年より片貝町煙火協会　申請責任者　藤塚　昇司（片貝町煙火協会長）
以上番附記載等に依る

米寿の皆さん　おめでとう！

JA片貝町（友田明石組合長）では大正4年生まれで今年米寿を迎えたJA片貝町管内の二十三名（片貝本所＝男5名、女13名、高梨支所＝女2名、鴻巣支所＝女3名、尚一昨年は45名、昨年は32名）にお祝い状と金杯、それにお菓子を本人に届け長寿を祝った。

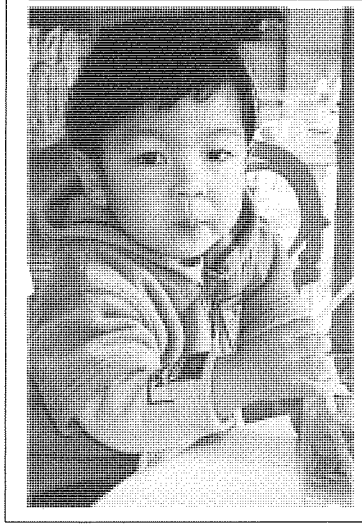
1月8日火曜日の朝からJA片貝町では友田組合長を始め幹部職員が手分けして、米寿を迎えた人たちの各家庭を訪れ「おめでとうございます。これからも健康に注意して長生きをして下さい。そして後進の指導をお願いします」と激励とお祝い品を届けた。お祝いを受けた方々の一人、小紙平成13年9月1日号ニューマンウォッチングに登場願った屋敷の相崎ヨシさんは「お母さんを始め多くの人たちのお陰で、米寿が迎えられ大変嬉しいです。また今年の夏休みには子供たちと一緒にラジオ体操をやり、百歳まで元気で生きるつもりでガンバル」と元気よく語り、米寿を迎えた現在の心境を『戦場に散るべき命永らへて米寿を祝う安らぎの里』と短歌に読んだ、屋敷の市川八郎さんは「戦争に行き無事帰ってこられ、こうして長生き出来るのも、親からもらった丈夫な身体のお陰と今も親に感謝しています」と語り、今も現役バリバリの五之町の安達仙太郎さんは「長生きの秘訣は、無農薬の野菜を沢山食べて、適量の晩酌をしていることと思います」と笑顔で語っていた。また、各家庭を訪れた友田明石組合長は「今年米寿を迎えられた皆さんは若々しく非常に元気でした。ご本人にお会いして、直接お話を聞く事が出来て良かったです」と語っていた。

大正四年生まれで、今年米寿を迎えた人達は次のとおり。（）内は町名、誕生日、世帯主の順。敬称略。

▽三重堀キミ（一之町、1月25日、国夫）、▽黒崎三郎（一之町、12月30日、三郎）、▽安達正四（町裏、2月2日、政春）、▽金子トセ（茶畑、8月18日、トセ）、▽黒崎ヨリ（稲場、9月17日、正樹）、▽小宮京子（稲場、11月28日、政昭）、▽佐藤アヤ（三之町、4月9日、アヤ）、▽黒崎フユ（三之町、12月6日、重夫）、▽本田キミ（屋敷、1月23日、隆一）、▽相崎ヨシ（屋敷、1月25日、恒夫）、▽市川八郎（屋敷、3月2日、八郎）、▽吉井キセ（屋敷、7月5日、孫市郎）、▽新野ヨシ（高見、11月17日、京太郎）、▽安達ハル（五之町、3月3日、幸雄）、▽安達ハツ（五之町、3月20日、俊夫）、▽安達常一（五之町、10月20日、建造）、▽安達仙太郎（五之町、12月3日、仙太郎）、▽安達ウメ（八島、6月22日、正次）、▽山賀ハツ（鴻巣、3月28日、東吾）、▽山賀キヨ（鴻巣、5月4日、武）、▽小林マツ（鴻巣、8月7日、慶松）、▽菊川松野（高梨、2月5日、幸三郎）、▽岡キサ（高梨、8月17日、重夫）

ハローベイビー

○友田彩斗（あやと）ちゃん（高見）
パパ理さん（27才）
ママ貴子さん（27才）
第1子長男
平成11年12月8日生
現在の体重13.5kg身長88cm
Q名前の由来
A自分の色（個性）を大事に、将来輝いてほしいと願い名づけました。
Qお子さんの様子
Aとにかくバスが大好きで、毎日バスのミニカーを両手にいっぱい持って遊んでいます。寝る時も離しません。
Qどんな子に育って欲しいですか。
A明るく、元気一杯知識豊富に育ってほしいです。



片貝ヒューマンウォッチング　品田支所長が語る

片貝支所長の品田茂氏、56歳、西吉谷甲（通称上村）。小千谷高校定時制を卒業。市役所ではガス水道局、都市開発課、建設課などを経験、昨年4月の人事異動により片貝支所に赴任して、間もなく一年を迎えようとしている。

片貝町に赴任しての感想は「思っていたとおり、気風のよい、飾らないまち」ということ。具体的には①伝統的な学問のまちとして、現在も地域の学校に対する想い、支援は素晴らしい。そのせいか、子供達も礼儀正しく、爽かな印象を受ける。②堅実な経営をする商工業者が多い。③中学校の同級会・同窓会の結束が強力であること。④伝統芸能保存に力を入れている。⑤JA片貝町が地域の経済・文化・スポーツ等に役割を果している。などたて続けに並べたてた。

反対に短所を尋ねると少し考え、言葉を選びながら、①まち全体として片貝まつりに発揮されるパワーが、どうも日常的に見られないのでは……。②長所と短所と裏腹であるが、いい意味でのお節介が、時としてマイナスに働くことがあるような気がする。③これも表裏一体であるが、堅実であるがゆえに少し保守的。④諸々の歴史的経緯などから理解出来るが、小千谷市の一員としての一体感が乏しいように感じる。

さらに片貝まつりについては「伝統のまつりとして世界に誇れるものである。このまつりに寄せる片貝人の情熱は祭りの原点と思う」と絶賛。しかし「少子化が課題、それぞれの時代の人達が精一杯やれるまつりをやればよい」。

片貝町のまちづくりについては「全町を網羅した協議会、全世代をカバーする同級（窓）会があるので、この二つの組織が主体となり話し合いを進めて行けばよい」。

支所長として「やるべき業務をきちんと行ない、今まで同様に親しまれる支所を継続。検討中の片貝コミュニティセンター建設に向け、地域の皆様方と市との円滑な話し合いが出来るように努力すること」と抱負を語る。

最後に自己PRをと水を向けると、「人相のせいで、敬遠されがちであるが、内心は人見知りをする優しい性格と思っています。片貝のみなさん、どんどんお声をかけてください」――（笑い）。

奥さん、長男、母親と4人暮らし。長女は東京で勤務。